全国編

防災・減災のページ

巡回ワークショップ　むすび塾　@東京・品川区八潮団地

河北新報社は３月20日、巡回ワークショップ「むすび塾」を東京都品川区の八潮団地で開いた。1923年の関東大震災＝❓＝からことしで90年。東日本大震災を契機に、首都圏でも備えの意識が高まりつつある。マンションなどの集合住宅が林立し、約１万3000人が生活する巨大団地の防災対策をどう築くか。減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長を進行役に、団地住民10人が、課題を話し合った。仙台市中心部で被災した語り部２人も加わった。

高層階の避難 工夫を

1万3000人生活 巨大団地の備え

各参加者が、災害後の避難や安否確認について疑問を述べた。団地の主に棟ごとに設けてある自治会の防災訓練など、さまざまな取り組みも報告した。

参加者の一人は高層マンションからの避難に関して「一つの階段に住民が殺到する恐れがある。高齢者も多く、どういう順番で逃げたらいいか」と助言を求めた。

木村理事長は「火事でも起きない限り、慌てて逃げる必要はない」と指摘し「わざわざ下におりなくても、一つのフロアでいったん集まる場所を決めておけば安心できる」と提案した。

仙台市太白区の自宅マンションで被災した畑中泰治さん(67)は語り部として参加した。「震災直後は何も考えられない状態だった。これからは、できるだけお年寄りの入居者の顔を覚え、階ごとに災害時の担当者を決めていくことも考えている」と話した。

参加者は家族の安否確認の方法として災害用伝言ダイヤルの使用や、待ち合わせ場所を事前に決めるなどの対策を報告した。木村理事長は「あまり知られていないが、公衆電話は災害時優先電話になっており、利用価値が高い」とアドバイスした。

参加者は、各自治会で力を入れている防災対策について「定期的に、棟の周辺の草刈りと防災訓練、バーベキューを合わせて実施している」と紹介した。一方で「住民の中で自治会に入ろうという雰囲気ができていない」「入居者の出入りが激しく、家族構成も名前も分からない人が多い」といった課題を話した。

木村理事長は「自治会で災害時の備蓄物資を用意し、自治会に入っていれば配給券を渡す、といった交換条件を設けるのも一つの手段ではないか」と提案した。

避難所運営の課題なども話し合った。語り部の一人で、仙台市荒巻小の前校長大谷義昭さん(61)が震災後の避難所運営の体験を報告。「震災を通じ、学校と地域との連携の重要性を感じた。新たに町内会や社会福祉協議会などで組織を作り、避難所運営のあり方などについて話し合っている」と説明した。

約１万３０００人の住民が暮らす巨大団地には学校、商業施設、病院もあり、小さな自治体ほどの規模がある。その備えについて、参加者と語り部が意見を交わし、住民も耳を傾けた

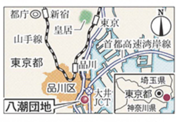
周囲は運河 橋でつながる

周囲を運河に囲まれ、島のような場所に立地する八潮団地

八潮団地　東京都品川区の東側に位置する。東京湾に面する埋め立て地。地区の西側とは運河で隔てられ、複数の橋でつながる。

入居開始は1983年で、現在、約１万3000人が暮らす。高齢化率は25.6％。40.8㌶の敷地に72棟あり、大半が高層になっている。学校、商業施設、病院なども立地する。

区の「地区内残留地区」に指定されている。震災時に大規模な火災が発生して延焼したり、津波で浸水したりする恐れは小さいとみられているためで、自宅での避難生活を前提とする。



地区全体で年に一度実施する防災総合訓練には毎年1000人以上が参加。交流活動や防災知識の普及、情報提供などにも取り組む。

❓関東大震災　神奈川県西部にある相模トラフ沿いの断層を震源に、1923年9月1日(土曜)午前11時58分、マグニチュード(M)7・9の大地震が発生した。関東地方で死者、行方不明14万2000人に達した。家屋の全半壊25万4000戸、焼失44万7000戸。

東京では下町を中心に3日間燃え続け、住宅は全戸数の約6割を焼失した。旧陸軍被服廠(ひふくしょう)跡の空き地では、避難者の大八車に火が付き、空き地全体が猛火に包まれ、避難した約4万人のうち約3万8000人が焼死した。

旧大井町(現在の品川区の一部)の役場が発行した「大震災記念誌」によると「大井町役場は退庁間際の一瞬、何ともいいがたい地鳴りが聞こえたかと思う間もなく、天地鳴動怒濤(てんちめいどうどとう)にもてあそばれる木の葉のように揺れに揺られるようであった。屋外に出ると頭上より屋根瓦が落下して危険限りなく、壁は割れ、柱は傾き、続いて歩行の出来ないほどの猛烈な揺り返しが何度も繰り返しやってきた」とある。

大井町の犠牲者は25人で、その多くは工場やれんが塀の崩壊が原因だった。倒壊家屋は全壊・半壊を含めて185棟で、火事による大きな被害はなかった。

関東大震災で壊滅的な被害を受けた東京・浅草（古今災害写真大観より）

■むすび塾に参加して ―― 東京・品川区八潮団地

【防災の取り組み】年に1度の防災訓練時にバーベキューパーティーも開き、住民の楽しみと交流の機会にしている。

＝品川区防災協議会八潮地区協議会理事・本間彩子さん(65)

【災害時の心配】私の棟には高齢者が多い。災害時は棟と棟の間にある中央階段を下りる計画だ。どうしたらパニックにならずに安全に下りられるだろうか。

＝八潮5丁目アパート49号棟自治会長・小泉せい子さん(61)

【災害時の心配】外国人の世帯や若い世代など自治会に関心がない人が増え、普段からコミュニケーションが取れない。いざという時が心配だ。

＝潮路南第一ハイツ自治会長・鰐川晴夫さん(68)

【災害時の心配】私の棟は入居者の出入りが激しく、自治会に入っている世帯は一部だ。災害に備えて家族構成や名前は把握しておきたいが、方法が分からない。

＝潮路南第一ハイツ自治会副会長・山下健二さん(72)

【防災の取り組み】災害時は数百人分の炊き出しができるよう訓練している。災害発生後の数日間は行政に頼れない。自助、共助の備えが必要だ。

＝潮路南第二ハイツ自治会防災委員会書記・小林昭八さん(63)